

經典餘師

孫子之部

上

口 11

1029

37

口 11
1029
37

孫子
始計第一

孫子卷上

始計第一

我々の勝負と計て可なり
名將は何事も預て計にあり暗將は其場
やんで疑惑あり

孫子曰兵者國之大事

軍戰の事と兵

鉄炮盾矛惣て武具一切の総名人々持たざる故
兵卒とも云ふ此段の軍と云ふに至て重き事と好む

うゝる義と説くたふ敵のわけてその國と切
りくるとも封内とも田地とわけて人民とをさ

い草木五穀財寶ともいふかりて万事もつけて
しうりし誠は國家の大事なりすやと

死生之地存亡之道不可不察也

大將は其の才配をわたりて其の生か
かひもその跡のかりゆきと依て其の生か

孫子

孫子

孫子

故之と経す
五事と以し
之と校する
計と以て而
情と索む

一曰道二曰地
三曰天四曰將
五曰法

道ハ民と上
之意と同せ
之與死す可
之

與生く可
危きと畏不也

天者陰陽寒暑
時の制也

又ハ存保の二ツハ道の
第一義也 故經之以五事校之以

七計而索其情 經ハ常とよみて又ハ

五ヶ条の事と常ハ身ヲ引ケテ柱礎とナリテ
務道ナリト又下云七ヶ条の計と以テ
敵我と比校スルテ勝負の幾と察 一曰

道二曰天三曰地四曰將五曰法

上云五事の次第ナリ天ハ人間の重ト
立ズルハ第一番ニ置ト其子細ハ人間
の務ハ道ニ在ル義ナリ道を務メテ
天と論スル益ナリ故ハ道を第一ニ置ト

令民與上同意可與之死可與之

生而不畏危也 六經論語等ニ云道

ハ聖人先王の仁智道ト異ナリ兵書ニ
ハ凡テ大將ハ人ト使の道ナリ此
ハ道トシテ民を用テ常ニ

意圖スルの意アリこの段のハ大將ハ臣下
とシテ臣下忠心ナレバ主從意と同一生
死と與スル 法ハ約束ナレバ

只一命と惜ムルナレバ合戦ハ危キ場中ニ
テ鬼ヤセム角ナリ宜シキ危キ畏ムルナ
リ是ハ令の道ハ大將の 天者陰陽寒

暑時制也 陰陽ハ風雨晦明晝夜ナリ
ハ宋高祖軍と出ルハ往亡日ナリ
ハ人々心ニ惡日ナリ往味方の亡日ナリ
勝利と得ルハ又ハ風雨ニ乗トテ夜討ト

地者遠近險易
廣狹死生也

將者智信仁勇
嚴也

又風上より火攻と用やぶるやうに寒暑
太甚しき兵と出さば又北國寒る土地に
夏は利なりぬるも時の地者遠近險
制令の大将の器量あり

易廣狹死生也
地の理は遠近と察して遠と

死地是は生地と委曲は兼て守るべき
死地は生地と委曲は兼て守るべき

將者智信仁勇嚴也
智は敵の謀略

利は人情と能くするなり信は号令
と親類貴人よりするなり仁は士卒
を懼れ土地の民とかけ勇は敵と聞
て懼す鉄壁の固く閉圍の中へ入るなり嚴
は大鼓貝鐘の約束嚴重なり大鼓と
進ゆる鐘ときて合戦なり

法者曲制官道
主用也

法者曲制官道主用
如く上るなりと法者曲制官道主用

也
法は曲制と官道と主用なり

百騎二百騎の一曲々々旗の馬
印並印より金鼓を以て坐作進退の
制なりと官道と諸奉行物頭の官と
の司る事なり小屋の道なり主用なり

凡此五者將莫不聞知之者勝不
知者不勝故技之以計而索其情

凡此五者將莫不聞知之者勝不
知者不勝故技之以計而索其情

右の五事と能くするなり上の人の徳器
量は長短なりと此方の事なり手は能く
て彼方の事は不得手なりと心術は短
不肖なりとは捨るときは長きなり

中

五

夫いまだ戰未
 して而廟算を
 ち勝者算と得
 多也いまだ
 戰未して而廟
 算をち勝者算
 と得る算は勝
 算少なきん
 勝不而況んや
 算無に於てと
 や乎吾此と以
 て此と觀に勝
 負見矣

大事の三畧を云ふ謀の密なりと要の得なり
 勝者の圖なりとも事の先を漏れ傳へるは
 夫未戰而廟算勝者得算多
 也未戰而廟算不勝者得算少也
 多算勝少算不勝而況於無算乎
 吾以此觀之勝負見矣
 廟算と祭の
 神靈と祭の
 宮居かり國家大事なり我に祀るに
 かり依て戰ふに廟算なり
 五事七計の算なり
 の算も多得るに必り勝るなり
 算の少るに勝るに必り負るなり
 人負るに必り負るなり
 此道理に依て勝負
 明白に見るなり

作戰第二

孫子の曰九兵
 と用る之法馳
 車千輛車千
 乘帶甲十萬
 里糧を饋内外
 之費賓客之用
 膠漆之材車甲
 之奉日千金
 と費然十萬之
 舉矣

作戰第二

已に始に計をかりて夫の
 戰と作かり長陣とせむ

孫子曰九用兵之法馳車千輛革
 車千乘帶甲十萬千里饋糧内外
 之費賓客之用膠漆之材車甲之
 奉日費千金然後十萬之師舉矣
 兵と用るの害なりと極むるなり
 器とて已に不を得て用といふは
 費万民の害なり其法なり
 千乗かり之と駕する馬四千疋なり是と馬と
 りふるなり大將三人士卒七十二人なり

其戰ふと用る
也勝と久し
則兵と鈍
銳と挫城と
攻むべし
屈と久く師と
暴せば則國用
足不

又兵糧武具と載て革く色く輜千り
牛十二頭と駕するなり司る人數二十人
用費日々千金も入る子細軍兵の糧と
饋下の人々も談合恩賞等の賓客も又
入用又謀士説客等の逗留の費の外膠
漆などの材やび車馬等の奉養も
限すその費莫大なりその大作憂う
て後やうに十方の師衆と舉ぐまじり
る所是なり其用戰也勝久則鈍
兵挫銳攻城則力屈久暴師則國
用不足
兵と用ふ手早とたふしなりたと
銳氣と挫き万事つる鈍べし城と攻む
かけれ屈と依て國の入用莫大なり不足

夫兵と鈍銳と
挫力と屈し貨
と彈と起し則
諸侯其弊と乗
有と雖も起智
後と善すると
能不安

故兵の拙
速と聞
利と巧之
久と觀未也
夫兵久し
國利者未
之有也

夫鈍兵挫銳屈力
在と暴く人數の外
彈貨則諸侯乘其弊而起雖有智
者不能善其後矣
諸侯の虚とるひの弊と乗て起る加之野伏
士一起の徒輩とるひ出べしそのとん至てい
智者名將つるひ後のとちつる善すると
能すきりり貨彈と國の入用つるを
故兵聞拙速未觀巧之久也
肝要つる子細機變拙くも手速
くもつるなりはかり利なりたし智謀
巧なり久し鈍て屈する
利つるを未觀しなり
久而國利者未之有也故不盡知
夫兵

故之害と知不若
用之利と知
不能不也

善兵を用ひ者
役再び籍せ
不糧三載取
不用と敵國
取糧と敵
因故軍食足
可也

國之師貧
と者遠く輸

用兵之害者則不能盡知用兵之
利也

利也
依て知と用て久しく
人數と出して國に利あり
盡知と聞ふなり
故に兵を用ひの害と善

用兵者役不再籍糧不二載取用

於國困糧於敵故軍食可足也

と用ひ大将軍役一度と相濟へ
出軍と籍て人數と相濟へ
糧食も

の兵糧を敵國に因て取とる
國の費といふ味方の國之貧於

師者遠輸遠輸則百姓貧近師者
貴賣貴賣則百姓財竭財竭則急

於丘役力屈財殫中原内虚於家

國負く師衆事と欠とる道と物と輸
依て下の百姓と物と輸

貴賣貴賣則百姓財竭財竭則急
貴賣則國の用金おびやく
百姓の財竭て

後丘役軍中の力屈とる財殫
原内虚の外の困窮とる百姓之費十

本其七公家之費破車罷馬甲冑

弓矢戟楯矛櫓丘牛大車十去其

輸遠く輸
百姓貧
近者賣と貴
と賣と貴
財竭財竭
急なり力屈財
殫中原の内
家虚
百姓之費十
其七と去公家
之費車と破馬
弓矢戟楯矛
櫓丘牛大車十

經典餘師

孫子卷之六

六

其六と去

故智將務

一鐘吾二十鐘

吾二十石當

利と取者貨

六國中の百姓を以て其の内に七は去

甲冑弓矢戟矛楯櫓丘役の牛重荷を載

大車そのはう一切の武具十の内は六は

ゆゑに故智將務食於敵一鐘當

依て明智の大將糧食と敵國を以て取

國の二十石を當たり運送の費はきく種

斗六石四故殺敵者怒也取敵之利

者貨也故兵は久留て戰勝を速疾す

依て敵を殺し味方とて恩賞す

車戰車十乘

上と得て其先

得者賞て

其旗と更

之と乘卒善

是と敵と勝

而強と益と謂

故兵貴勝

之不故兵

之司命國家安危之主也

敵の土地金銀を用ひてこれ敵の利

と取て味方の貨とて惠て費なき道理

車戰得車十乘以上賞其先得者

而更其旗車雜而法乘之卒善

而養之是謂勝敵而益強

敵は勝て車十乗も得て其先一番

味方の物も更改る車は味方に入して養

乘り又降参の士卒は味方とて養

形勢つて就べりて敵は勝は益

故兵貴勝不貴久故知兵之將民

謀攻第三

孫子の曰夫兵と用之法國と全と破之と上と為國と破之と上と次軍を全とす破之と上と為軍と上と次旅を破之と上と次卒と全と破之と上と次伍と破之と上と

謀攻第三

謀計と以て敵城と攻とすなりとんとねがう民ととを以て上計とんは孫子の本意なり

孫子曰夫用兵之法全國爲上破國次之全軍爲上破軍次之全旅爲上破旅次之全卒爲上破卒次之全伍爲上破伍次之

全と破之と上と次伍と破之と上と

合戦と用と好ある已と不得と勝利と貴尚とりの義と述とかり先第一自國

他國も兵と動と敵國の形勢とて是上の計畧なり破て味方とけんば是非敵國と破て味方とけんば勝利と得い善とけんば全完するなり下劣なり依て之と次とけんば一戦い人数一万二千五百人なり旅い五百人なり卒い百人なり伍い五人なり凡そ多人數より一人に至ると全完して勝利と取と妙けんば

是故百戦百勝非善之善者也

是故百戦百勝非善之善者也不戦而屈人之兵善之善者也

度たりふ毎二勝利と得と人善とけんば五十百も真し善とけんば人衆と害と

故上兵伐謀其次伐交其次伐兵其下攻城

攻城之法已久而不得者為之櫓

戰争と不用して人の軍兵と屈服して善くするは善智略なり。上なる者は徳を以て敵と服し、次なる者は軍威を張て降伏せしむるなり。例、羣、藉、見、く、り

故上兵伐謀其次伐交其次伐兵

其下攻城 依て兵を用ゐるの上手といふは敵の謀略をふいて味方の謀略

攻城之法為不得已脩櫓輶輶具 次は又いふ所の虚と攻て勝利を得るなり。その次は城と攻るゝに委細に下の段よりいふなり。て敵を弱しむるなり。是上の謀と伐よりいふなり。依てあゝい味方へより又いふの交接と云ふなり。國たひりかゝる頼みありの相手と味方謀略を依てあゝい味方へより又いふの交接と云ふなり。て敵を弱しむるなり。是上の謀と伐よりいふなり。次は又いふ所の虚と攻て勝利を得るなり。その次は城と攻るゝに委細に下の段よりいふなり。

器械三月而後成距堙又三月而

後已 費一器械と云ふは兵衆と殺して

尚るの勝敗なり。其の法輶輶車とて豪と云ふなり。得る依てなり。其の法輶輶車とて豪と云ふなり。

壘攻城の具といふは日數とて作する一切の器

櫓車の大盾なり。三月といふ日數なり。詞なり。距堙といふは向城と云ふは土手山と造成

之に準して作事と云ふなり。將不勝其

忿而蟻附之殺士卒三分之一而

城不拔者此攻之災也

守て動かし難くするものなり。其の費は城に守るの長陣は勝るゝて短兵急は戦攻なり。其の費は城に

輶輶三月而後成距堙又三月而後已

將其忿を勝す 附て之に蟻附之殺士卒三分之一而城不拔者此攻之災也

故善兵者用者
 人之兵と屈して
 而戦ひは非ざる也
 人之城を拔て而
 攻め非ざる也人の
 國を毀て而久し
 きる非ざる也
 必る全と以て
 故天下を争ふ
 利全と不可
 此謀攻之法也

細い屏裏は蟻の如くすくすく入り附くや
 城兵多しむるふ打つるべし
 城拔るるは其の大なり災禍と引くべし
 或は味方の内は狐疑と生じ又兵糧乏し
 く又裏切の如く又敵の後詰り
 災禍と入りなり 故善用兵者屈
 人之兵而非戦也拔人之城而非
 攻也毀人之國而非久也必以全
 争於天下故兵不頓而利可全此
 謀攻之法也 故善兵法よくく全き勝
 用 敵人と屈服し不攻して城を拔く久
 頓 敵の陣城と毀れく全

故兵と用る
 之法十は倍
 之と圍五は倍
 則之と攻倍は
 能之と守若
 堅大敵之擒
 也

完と以て天下の間は争闘し是とくはなり
 故味方頓れれば勝利す 實謀略
 攻城の要 故用兵之法十則圍之五
 則攻之倍則分之敵則能戦之少
 則能守之不若則能避之故小敵
 之堅大敵之擒也 故論する如く
 大敵と明やり敵兵千味方十倍は一万は
 取圍てその降参と待も可なり五倍は必
 一の計數と以てたふべ虎口と留て圍攻戰など
 一定は拘るべし又敵千味方二千の倍は示
 捨て攻伐たふべ正兵は敵と對し奇兵は敵の
 捨てられしき如く攻めたり又千は倍と敵は人
 衆を取べし又味方人数少寡ければその圖と見

故に勝と知に
五有以與に戰
ふ可以順に戰
ふ可不と知者
の勝衆寡之用
と識者の勝上
下欲と同する
者の勝眞と以
て不虞と待者
の勝將能とて

三軍の事と不知して軍中の政法と同
 其るを以て是は君の心は猜疑の
 かり物軍の外の事と及ぶ三軍中の
 權を以て時を臨み事を就て知畧は是は他
 不洩してその遂に後と可見なり
 將の委任は同一共之を以て軍中の
 狐疑を以て之を以て軍中の不
 周密なるを以て虚を棄てて敵國の諸侯
 に至る難義なる是と謂て軍中と乱
 て敵は勝利を引けるなり
 知勝有五知可以與戰不可以與
 戰者勝識衆寡之用者勝上下同
 欲者勝以虞待不虞者勝將能而
 君不御者勝此五者知勝之道也

而勝此君御不者ハ
勝と知五の者ハ
之道也

故曰彼知
己不知
殆不彼知
而己知
一勝一負
知彼
知
敗者不知
每戰必
知

可勝の道理五ヶ条あり。一、寡兵を用ゐて敵の不
 三、上下主従の艱難又ハ嗜欲を同みたる
 五、の者、君、麋、の、制、御、あり、と、そ
 故曰、知彼知己、百戦不殆、不知彼
 而知己、一勝一負、不知彼、不知己、
 每戦必敗。先我味方の虚實、強弱の理、
 又敵の虚實、強弱、不知ハ勝負、相半、
 敵情、不知ハ勝負、相半、
 又彼と元より不知ハ勝負、相半、

軍形第四

戦争をやつて勝利するは道理なり
依て戦ふ毎に必ずて敗るゝものなり

軍形第四

上は戦争の不利を論
く戦争は及なり依てその形を
勢いとけり論なり

孫子の曰昔之
善戦者先
勝不可と為
待敵之勝可
在勝不可
在故善戦
者能勝不可
必勝不可
日勝不可
而為不可

孫子曰昔之善戦者先為不可勝
以待敵之可勝不可勝在己可勝
在敵故善戦者能為不可勝不能
使敵之必可勝故曰勝可知而不
可為不可勝なり戦攻と善する名將は先敵を
敵に可勝の謀略と致して待てり第一將の徳なり

勝不可と為
守也勝可
攻也守可
足不守
攻も則
なり

善守者九
地の下蔵
攻者九

守則不足攻則有餘
不可勝者守也可勝者攻也
敵は勝るべきや自由なりと不能なり之
は依て勝利の道は可知なり勝利を得る
可為不可勝者守也可勝者攻也

者藏於九地之下善攻者動於九
地の下蔵
攻者九

善守

天之上は動故
能自ら保て
而全く勝也

而全まことく勝かち也

天之上故能自保而全勝也

善守

勝と見ゆ衆人
知所は過不善
之善なる者も
非ざる也戦勝て
天下善と曰ふ
善之善なる
者も非ざる也

自守て味方と保て敵と依て我
勝利と全見勝不過衆人之所知非
善之善者也。戦勝而天下曰善非
善之善者也。戦攻と善して勝と取と

善之善者也。戰勝而天下曰善。非

善之善者也 戦攻と善して勝と取

故^コに秋毫^{シュウモウ}と舉^{アゲ}
 うん^{ウン}多^タカと為^セ不^ズ
 日月^{ニツグハ}見^ミ、明^{アカリ}目^メ
 と為^セ不^ズ雷^{ライ}霆^{テイ}と
 聞^クハ聰^{ソウ}耳^{ミミ}と為^セ
 不^ズ

人の善とてよと勝利の
 實は善とてなり
 多力見日月不爲明目聞雷霆不
 爲聰耳
 秋の末は鳥獸の毛かそくて常ふ
 りも輕く人の皆志

爲聰耳。

秋の末の鳥獸の毛が、
りも輕い。この段の喩へ、
凡人の皆、

古へ之所謂善
戰者ハ在勝易
きハ勝者也故
ハ善戰ハ者之
勝ヤ也智名無

易勝者也。故善戰者之勝也。無智聞（ヒキニ）。雷（カミナリ）。古之所謂善戰者。勝於（ヒキニ）。明（アカシ）。目（メ）。日（ヒ）。月（ツキ）。見（ミ）。耳（ミミ）。且（カ）。

勇功無故其

名無勇功故其戰勝不忒

謂戰伐也

善者兵卒兵糧他の費なく目は立ば依てそれ
るて勇猛大功と立し見たりき喻は時と
す枝をとり勝利を取たり故その根本大敵は夫
れなり

不忒者其所措勝勝已敗者

也。勝の不忒は子細に敵既に敗る形なり之

難と之を何の故善戦者立於不敗之

地而不失敵之敗也是故勝兵先

勝而後求戰敗兵先戦而後求勝

不者其勝
措可已也
勝也
故善戦者
立於不敗
之
地
而不失敵
之敗
是故勝兵
先戦而後
求勝

戦と求敗兵
先戦ふて而
後

善兵と用る者
は道と修て而
法と保故と能
勝敗之政と為

兵の法一曰
度二曰量三
曰數四曰稱

經典餘師

孫子卷之六

十六

善用兵者修道而保法故能為

勝敗之政

法一曰度二曰量三曰數四曰稱

兵

勝敗の政と達し知るべきなり

經典餘師

孫子卷之六

十六

稱五曰勝

地度と生に

度量と生に

量數と生に

數稱と生に

五曰勝

五事の兵家の大事極意

地生度

地形の戦争の事、地の依り、險阻、平原、或は城郭とある、又陣營、

險阻、平原、或は城郭とある、又陣營、

度生量

量の斗斛の事、物のけり、

糧の多少、そのついで、并は小屋配分、又倉庫の虚實、人力の多少、虎口の多少、等、

生數

數、算の、先備の手、手配、手組

凡て人、數、多、少、の、

數生稱

稱、は、

稱勝と生に

故、勝、兵、ハ、鎰、を、以、

勝者之戰、ハ、

稱生勝

敵、の、重、け、ん、

故勝兵

若以鎰稱銖敗兵

若以銖稱鎰

誠、ハ、勝、利、と、得、の、形、ハ、重、の、

六、毫、ナ、リ、鎰、ハ、二、百、日、の、重、ナ、リ、勝

者之戰、若決積水於千仞之谿者

形也

軍、ハ、勝、の、い、ハ、い、積、溜、る、水、ハ、數、

兵勢第五

兵勢第五

兵と用ゐるの法はすべし上と委曲

戦陣の要は他の勢類と取らざるにすべし客兵と撃んとすべし翼ととらざるにすべし他の鳥

孫子曰凡治衆如治寡分數是也

衆の闘ふ如形名

孫子曰凡治衆如治寡分數是也

闘衆如闘寡形名是也

寡兵の五色の名等とて

太鼓貝金旗馬印

中央の太鼓とて合戦中

貝金とききて退却

自在なり

敵而無敗者奇正是也

進退の速

所加如以碇投卵者虚實是也

用ゐるの大事虚實

孫子兵法

凡戰者正以奇勝

故善出奇者如江海之不可竭也

虛者如無其實而實者如無其虛也。故善出奇者無窮如天地不竭也。死而更生四時是也。如江海之不可竭也。終而復始日月是也。

聲之變勝不可聽

色之變勝不可觀

味之變勝不可嘗

戰勢之變勝不可奇

聲之變勝不可聽也。色之變勝不可觀也。味之變勝不可嘗也。戰勢之變勝不可奇也。正奇正之變不可

可勝窮也。奇正相生。如循環之無

端。孰能窮之哉。
味五聲のたのめい 誠は循環の端なり

激水之疾。石

激水之疾。至於漂石者。勢也。
水の性

驚鳥之疾。折

驚鳥之疾。至於毀折者。節也。
勢鳥

故善戰者。其勢險。其節短。

故善戰者。其勢險。其節短。
善く其曲節は短きなり

勢如彊弩。節如發機。

勢如彊弩。節如發機。
勢形は激なり

紛紛紜紜。亂而不可亂。

紛紛紜紜。亂而不可亂。
紛々々々

渾渾沌沌。形圓而不可敗。

渾渾沌沌。形圓而不可敗。
渾々沌々

亂生於治。怯生於勇。弱生於強。

治亂數也。勇怯勢也。強弱形也。
事物は勇と怯と數なりて治なり中なり亂なり

故善戰者動
 者之形也
 必從之予之敵必取之以利動之
 以本待之
 敵必示之以利動之
 取利必以之
 動本以之
 之待

故善戰者
 求之於勢
 不責之於人
 故能擇
 人而任勢
 勢者其戰人也
 如轉
 其人也
 勢者其戰人也
 如轉

必從之予之敵必取之以利動之
 以本待之
 敵必示之以利動之
 取利必以之
 動本以之
 之待
 故善戰者
 求之於勢
 不責之於人
 故能擇
 人而任勢
 勢者其戰人也
 如轉

也木石之性安
 則止圓則行
 故善戰者
 如轉

虛實第六
 故善戰者
 如轉

木石木石之性安則靜危則動方
 則止圓則行
 故善戰者
 如轉
 虛實第六
 故善戰者
 如轉

將の奇正變化の妙なるを名將も
時を依て處する時を愚將も
實なるの時を

孫子曰凡先
戰地を處て
敵と待者ハ佚
後て戰地
處んく而趨
戰者ハ勞

故善戰者
人致して
人致さん不

能敵人自
至ら使し者
之利すん也

孫子曰凡先處戰地而待敵者佚

後處戰地而趨戰者勞

故善戰者人致して人致さん不

戰者致人而不致於人

能使敵人自至者利之也能使敵

人不得至者害之也

故敵佚

能勞之飽能飢之安能動之出其

所不趨趨其所不意

行千里而不勞者行於無入地

也攻而必取者攻其所不守也守

而必固者守其所不攻也

孫子卷之十

能敵人至
得不使者
之害すん也
故敵佚
能之と勞
飽能之と飢
安能之と
動す其趨
所出其意
不所趨

行千里
而勞者
人無地
也攻而
必取者
其守
ら不所
攻

人不得至者害之也
故敵佚
能勞之飽能飢之安能動之出其
所不趨趨其所不意
行千里而不勞者行於無入地
也攻而必取者攻其所不守也守
而必固者守其所不攻也

孫子卷之十

攻^きす^すれ^れ
 不^ふ固^こ也^や
 所^{しよ}之^の守^して^て
 と者^{もの}其^{その}必^{かならず}
 守^しれ^る

故に善攻る者
の知らず守る
者、敵其攻る
所を知らず

命いのち故ゆゑに能敵之司のしやう
乎や無聲むせう至いたる神かみ
乎や無形むぎやう至いたる神かみ
微い乎や微い

進すすむで（而）禦まも可うう（ん）
 不ふ者ものハ其その虚きょと
 衝つけ（ば）也（う）退たいい
 て（而）追お可う不ふ
 者ものハ速すみく（や）
 及およ可う不ふれ（ば）
 也（う）

故に我戰ふと欲は敵壘と高溝と深すと雖も我與戰ふ不得不る者其必ず救所と攻れん也我戰ふと欲不は地と畫く(而)之と守と雖も

心と勢一苦とほむる一たへば晋の大將
 軍鄧艾が蜀の國へまづいさゝか如く敵の防
 び軍勢やまき場所と行ぐへなり又城を攻め
 も必てのりともいふも北条の勢兵が笠衣の城
 と取しどく敵の守のつにともり攻めたり
 又味方いつも城と敵と不取ともいふ敵の来たり
 所すても心とくむり不意と
 うれづるぐのへなりノ
 故善攻者敵

不知其所守。善守者。敵不知其所。

攻。故て攻ての善者ハ敵の城内に其守る所とあると云ふ又城と守の善者と云ふ

寄手の者その攻べと場所
は知しつゝさぐりつゝなり
徴手チルカキ徴手チルカキ至於

無形神乎神乎。至於無聲。故能爲

敵之司命
實や名將の事
思議く神の如く
此を微妙に察す

て我ものいふにやんとては形なき聲も衆の人を
どくすなり故て大將の一人の所為して衆の人を
生死のいふなり天の人の命數と司とる星
なり大將の司命の星のどくす一進而

不可禦者衝其虛也退而不可追

者速而不可及也

又名將の圖を見て人衆をすゝむ退がゆ

敵追てきおひ速急すみそく故我欲戰敵雖高

壘深溝不得不與我戰者攻其所

必救也。我不欲戰。雖畫地而守之。

敵不得與我爭者乖其所之也

敵我與戰いを得
不者の其之
所と垂れば也

故 人 形

て而えん我ご形かたち魚ういれけび

則我專（イ）

而敵分我專てこぶん わせん

一とふ爲ハ敵分て

一と爲の敵分て
十と爲是十を

以^も十^と
て
其^も一^とは
と攻^せめ

也なり **(則)** て 我われ 衆しゆ 一いつ 敵てき 攻こう

也。我衆く敵寡く能衆と以。

寡一能衆と以て寡と撃とより

て寡と撃とるに
則吾と戦ふ

所^{ところ}の者^{もの}の約^{やく}は戰^{いくさ}ふ

所の者の終なり
美

戰鬪と思ふべし敵と戦ふとき
聖と高きところへ溝と深すともこの敵のとの
えとする救の所とせむるがゆくは敵いやくも出さ
うてたふよとせむる又名將にふまふべきこと
ほひあぐべたとく地の土は一文字と畫てこ
ゑと守んり敵とれと越えとて子細に敵
の之先の路とうごぶちあらやすすしむるゆへ
なり敵のころへと垂しむるのかりとて

故形ニ入レテ而我無形ハ則我專ニ而敵分ル

我專為一敵ト分テ為十〇是以十ヲ攻其

一也。則我衆敵寡。能以衆擊寡。則

吾所與戰者約矣。

又實と虚と實と虚と形と示し又正と奇と斐ト

我^{われ}の専^{せん}に敵^{てき}は味^{あじ}方の
對^{たい}配^{はい}の人衆^{じんしゆ}は敵^{てき}
十^と二^に倍^{ばい}なり味^{あじ}方の
兵^{へい}は敵^{てき}の小^{せう}勢^{せい}なり
約^{やく}二^に倍^{ばい}なり

吾所與戰之地不可知不可知則

敵所備者多。敵所備者多。則吾所

與戰者寡矣。
故て味方の戦闘ところの場
に敵は知らず。知らずば知

備^{ツク}多^タりづ^ツら^ラなり是^{コト}

故補前則後寡。補後則前寡。補左

則右寡備右則左寡無所不備則

無所不寡寡者備人者也衆者使

經史餘師

孫子卷之十

廿五

人備己者也。故て志く敵と計るるべし。衆

之曰則可千里而會戰不知戰地
 不知戰日則左不能救右右不能
 救左前不能救後後不能救前而
 況遠者數十里近者數里乎
 故知戰之地知戰

うちぶとくうし、その場よ田の圖ともしき
 づんば左の右と捨右の左と救ぐく前後度と
 いかふともなかり況て間ゆゑいハ數十里又

以吳度之。越人之兵雖多，亦奚益於勝哉？故曰：勝可爲也。敵雖衆，可使無鬪。

聞爭きこいそ之の計けい作つく之の而を知し動靜どうじやう之の理り形かたち之の而を知し死生しせい之の地角ぢかく之の而を知し有餘いうよ不足ふそく

故^コは兵^{へい}の形^{けい}する^{する}之^の極^{ごく}
 於^コ形^{けい}無^な至^し
 形^{けい}無^なバ則^{すなはち}深^{ふか}
 間^まも類^{るい}に能^{あた}
 不^ふ智^ち者^{しや}も謀^{まう}
 能^{あた}不^ふ形^{けい}は因^よて
 而^{シテ}勝^{かち}と於^コ衆^{しゆ}は
 措^そく衆^{しゆ}知^ちと能^{あた}
 不^ふ人^{にん}皆^{みな}我^{われ}勝^{かち}所^{しよ}
 以^{もつ}之^の形^{けい}と知^ちとも

兼て敵の持たる地形と軍兵とをくわへて用ゐる如きことをいふが

強弱の形とを以て敵とばし、存せしむるを警むるに、彼に死すべきの地あり、存するべしとの所

知なり
 又敵
 角て

其圖を手に握るなり

故形兵之極，至於無形。無形則濫。

間不能窺智者不能謀因形而措

勝於衆衆不能知人皆知我所以

勝之形而莫知吾所以制勝之形

莫一以之形知而吾勝之制之所

軍の形の方圓曲直銳の外なりとも時の變化
とどまりやし或は不意に出すといふの虚と
るに依て形無しといふなり敵の間に
ととるに窺はるべからず智者も謀計を

やとうね
とらに先形
なりその形を以て敵の對

道の定ぬ措きたり依て虚實を以て勝れ

知^ちる^る時^{とき}の形^{かたち}ハ見^み知^ちとく^く其^{その}勝^{かち}利^りと

製造^{せいぞう}する^し所^{ところ}以^{もつて}知^{しる}故^{ゆゑ}其^{その}戰^{いくさ}勝^{かち}不^な復^{ふた}而^{して}

應形於無窮

依てその敵に應じ
形の窮なきやうな
大兵形象水水之

形避高而趨下兵之形避實而擊

經史餘帙

系子卷之七

卷之四

虚と撃故に水
の地は因て
流に制兵は
因て而勝と
制に

故に兵は常勢無
水は常形無能
敵は因て變化
者之と神と謂
勝無四時之常

故に五行は常
勝無四時之常

位無日有長短
有月有死生有

軍争第七

孫子の曰凡兵
と用之之法將
命と合て衆と

虚故水因地而制流兵因敵而制

勝師の卦は坤の地なり坎の水なり

水の地は場と避て下るなり水は高き

如く兵を用ひて敵の實を撃つ

地は変化し兵の動くは敵

故兵無常勢水無常形能因敵變

化而取勝者謂之神依て兵法は定ま

陣法城築備の形は泥の無き機變者

故五行無常勝

四時無常位日有長短月有死生

水の火は克て火の金は水は克て金の土は火を克て

て常は相勝と定まりは四時短長

先後の變化は生る月有死生有

軍争第七三軍の事ハ争利と第一は敵の

虚は乗ぜんといふ味方の虚を畏れ

終て戦間の圖入はたの場所の相

争故と

孫子曰凡用兵之法將受命於君

聚和交而舍莫難於軍爭

軍爭之難者以迂為直以患為利故迂其途而誘之以利後人發先人至此知迂直之計者也

合軍聚眾交和而舍莫難於軍爭

軍爭之難者以迂為直以患為利故迂其途而誘之以利後人發先人至此知迂直之計者也

軍爭之利為衆爭之危為軍爭之利則輜重損

是の故甲と巻て而趨日

軍爭之利為衆爭之危為軍爭之利則輜重損

及委軍而爭利則輜重損

是故卷甲而趨日夜

不處倍道兼行百里而爭利則擒

三將軍と擒ふ

勁者ハ先リ疲

至五十里

而利と争ふ

則上將軍と蹶

其法半至

三十里

而利と争ふ

則三分之二至

三將軍

甲を巻て日夜

とゆく

將も敵も擒

一而至五十里

而争利則蹶上將

軍其法半至

三十里而争利則

三分之二至

地やうへ入る味方の大なる害なり

道里を兼倍て百里

勁者先疲者後其法十

一而至五十里而争利則蹶上將

軍其法半至三十里而争利則

三分之二至

先疲者ハ後勁者ナリ

又五十里より上軍の大將くるべし

北より蹶くべし

人より五六十人より

の二より

是故軍無

輜重無

輜重無

輜重無

輜重無

輜重無

輜重無

輜重無

輜重無

輜重無

則糧食無

則委積無

故諸侯之謀

豫交不能

知山林險阻

澤之形者

行用不能

導者不能

地利者

故兵以詐立

以利

輜重則無糧食則無委積則

故不知諸侯之謀者不能豫交不

知山林險阻澤之形者不能行

軍不用鄉導者不能得地利

故兵以詐立以利

地理

引

故兵以詐立以利

地理

引

故兵以詐立以利

者也

故其疾如風
其徐如林
侵掠如火
不動如山
難知如陰
雷震如動
知者勝此軍爭之法也

動以分合為變者也

兵の道と名づく時ハ詐偽をもつ

敵も動味方とし動す軍の進退ハ合自自在故其疾如風

其徐如林侵掠如火不動如山難

知如陰動如雷震

掠鄉分衆廓地分利懸權而動先

知迂直之計者勝此軍爭之法也

人衆と今て郷里の糧と掠り廓地と手はつ時ハ諸將の守と守と利と權衡と縣て動す迂直ハ直也

軍政曰

軍政曰

言相聞不故

言不相聞故為之金鼓視

相見不故

不相見故為之旌旗夫金鼓旌旗

金鼓旌旗者人

者所以一人之耳目也

之耳目所以也

軍中數万の

人既專一則勇者不得獨進怯

者不得獨退此用衆之法也

者獨退此用衆之法也

の下知と受て金鼓旌旗等して得專

故夜

故夜

夜の戦ハ

系子卷之十一

火鼓多畫の戦
ひの旗旗多人
の耳目變ずる
所以なり也
三軍の氣を奪
可將軍の心を
奪可

是故朝の氣
銳畫の氣
情暮の氣
歸善兵を用
者其銳氣を
避其情を
擊此氣を治
者也

治と以て亂
等と以て靜
待と以て心
治と待と
治と待と

近と以て遠
待と以て勞
待と待と
待と待と

正正之旗
無堂堂之
陳と擊と
れ此變と
者也

戰多火鼓畫戰多旌旗所以變人
之耳目也
三軍可奪氣將軍可奪心
勝負の
外一時の氣を奪ふ所を奪ふ敵の三

是故朝氣銳畫氣情暮氣歸善用
兵者避其銳氣擊其情歸此治氣
者也
足も歸中終の三日の間
氣初中終の三日の間

銳氣と情氣と
の道理と
以治待亂以靜待譁此治心者也
我に能く治て敵の軍法を奪ふ

勞以飽待飢此治力者也
以近待遠以佚待
勞

無邀正正之旗勿擊堂堂之陳此
治變者也
軍法の正々たる旗を
の敵いむと

十三

途^{みち}由^よ不^ず所^{ところ}
有^あ軍^{ぐん}擊^う不^ず所^{ところ}
有^あ城^{しろ}攻^{こう}不^ず所^{ところ}
有^あ地^ち争^{そう}已^や不^ず
所^{ところ}有^あ君^{きみ}命^{めい}受^う不^ず
所^{ところ}有^あ

者之利通ずる故に將に九變

[illegible]

兵を治るは九
變の術と知
之利と知
五利と知
雖も人を用
と得る能ふ

是故^{ゆゑ}智^ち者^{しや}之^の
慮^り之^の必^{かならず}に我^{われ}
利害^{りゐ}と難^{がた}に於^お

信の利り
 へい 雑ざつ
 也や 而ゐ 務つと
 め

是日余而

卷之十一

五

節とてうへへの死を必てたゞふとていへ生活の
 理うへへとゞ又一説ふ上文の高陵とてうへへ以
 下ハケ条ふとていへ絶地魚留の一分と合せて
 九變の文とて又地地とて以下との文と
 九地の文のまじり
 途有所不由軍有所

命有所不受。

道途ミチ由ユふフ勢セなりナリ

敵軍

無理なる人數を撃攻する

攻取

又守また土地とち又無な益えき手罪てざい

戦場

又君の命とて

故將

通於九變之利者知用兵

故將通於九變之利者知用兵

矣。將不通九變之利。雖知地形。不

能得地之利矣

九變の利は通ずるを兵に
用ゝと知るは九變

の利と手とを知らずして地を利するは利を失ふなり

治兵不知九變之術雖知五利不

能得人之用矣

九變の利害と知
五ヶ条の利害と知

能く人を彫るの術は是故智者之慮

必雜於利害。

利と害と
智と人
事と慮
雑と

子かゝるふかし
とくを以て

利の
雜於利而

務可信也

利とてなり不意に

患解可也

是故^{ゆへ}諸侯^{しこう}と
屈^{くつ}する者^{もの}の害^{がい}と
以^{もつ}てす諸侯^{しこう}と
役^{やく}する者^{もの}の業^{わざ}と
以^{もつ}て諸侯^{しこう}と趨^こ
む者^{もの}の利^りと
以^{もつ}て

故^{ゆゑ}に兵^{へい}と用^{もち}り
之^{これ}法^{はふ}其^{その}来^きら
不^なと恃^たし無^なれ
吾^{われ}以^{もつ}て之^{これ}と
攻^{こう}不^なと恃^たし其^{その}待^{まち}

無^な吾^{われ}攻^を可^べく不^し
 有^あるを特^{とく}也^{なり}

故^コ又^{マタ}將^{マシ}又^{マタ}五^イ危^キ
有^{アル}必^{カナラ}死^シ我^ガ可^カ必^{カナラ}
生^ナ願^{ネガフ}又^{マタ}す可^カ念^{ネン}
て速^スく又^{マタ}の悔^{クハ}る
可^カ廉^{レン}潔^{ケツ}の辱^{ニヅカシ}
心^{ココロ}可^カ民^{ミン}を愛^{アイ}を
るの煩^{ワザワザ}のす可^カ

智^ち者^{しや}の利^りを以^{もつ}て先^{まづ}害^{がい}を信^{のり}行^{ぎやう}す

而患可解也。

い害がうゝんばあ内へ利とんぐ雑へちく
なり依て心患と解やぐゝちり意深し

是故屈諸侯者以害役諸侯者以

業趨諸侯者以利

是故^二利^一と害^二と^一を
とて^二敵國^一の諸侯

とてやんぎやうやう或い害がふふととははいいの
けく敵てきと屈服くつぷくせり或い業わざととははいいの

て敵^{てき}も苦^く勞^{らう}せしめしむるに利^りありと云ふは無^む量^{りやう}なり

故用兵之法無恃其不來恃

吾有以待之。無恃其不攻。恃吾有。

所不可攻也。

右に述ぶ如くと察し常は利害と交て工夫するべしなりといふ

敵の我土地へ来ざるを以て恃として僥幸とす
かゞん敵のきゝぬ内はまづ用心をせんと

かり又敵よりきり我城と攻むると以て時と
すべくに敵のきりぬ内は敵とせむべきでござ

故將有五危。必死可殺必

生可慮○ミ急可悔○廉潔可辱○ム愛民

可煩。

災禍と引ひつゝ危殆と何うと云へば故よ

血氣けつきの勇ゆうのそそ
とのいい助たすて益えきなり
殺ころす命いのちと必かならず死しと定さだめ
生い々々

と心と必るもの毎も虜もあら
の速く忽ちそやまた此方より
又心

辱^{ちと}しむ^ち又^{また}蕪^わ繋^つとて^とむ^むき^きこ^こい^いふ^ふに^によ^よさ^さ
と^と好^あむ^むの^のい^いの^の身^みよ^よう^うー^ーら^らぐ^ぐき^き事^{こと}の^のあ^あや^や

歷以余而

系二

十

凡此五者將之過也兵
と用る之災也
也軍と覆
將と殺こと必ず
五危と以てす
察せざる可
不也

愛するもの手下支配下のものと煩
凡此五者將之過也
用兵之災也覆軍殺將必以五危
不可不察也
凡て大將のやうな軍兵と損ト覆顛と
いふもの五危より生ずるものなり能察す

孫子卷之上終

